

タイ社会に果たす雑誌の役割（特集 アジア地域研究と雑誌 -- 「コア・ジャーナル」を語る）

著者	小林 磨理恵
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	198
ページ	22-23
発行年	2012-03
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00004036

タイ社会に果たす雑誌の役割

小林磨理恵

タイの基本的情報源となる学術雑誌・一般雑誌にはどのような特徴があり、また、それらはタイの学術情報交流や社会の動態とどのような関わりあいを持っているのだろうか。

●タイの学術誌・研究紀要

大学学部が刊行する紀要には、*Warasan Thammasat* (タマサート大学紀要)、*Warasan Setthasat Thammasat* (タマサート大学経済部紀要)、*Warasan Nitsat* (タマサート大学法学部紀要)、*Rathasatsan* (タマサート大学政治学部紀要)、*Warasan Sang-khomsat* (チュラロンコーン大学社会学部紀要)、*Warasan Koinai* (チュラロンコーン大学法学部紀要)などが挙げられる。タイでは、権威ある大学が紀要を刊行し、大学教授の論文を掲載するという傾向にある。時には、教授の後押しで有望な修士課程・博士課程の大学院生が論文を掲載し、自身の名を売って就職の足がかりの場とし

ている。若手研究者の論文で有名なものは、タイ現地語論文の中でよく引用されている。

一方で、大学紀要は編集者次第で刊行頻度やその内容が大きく左右される。いずれの紀要も盛衰を繰り返して、継続的に刊行されてきたものはごくわずかに限られる。例えば、*Rathasatsan*は、タネット・ウォンヤーンナワが編集長になって以後、内容が充実してきたという。彼は、手弁当で大学院生の研究報告会に出向き、優秀な大学院生を発掘して寄稿を依頼したりもしている。

同様のことはこれまでも起きている。一九八〇年代には、歴史学者のチャーンウィット・ガセートシリ、経済学者のランサン・タナ

ポンパンが編集者となり、*Warasan Thammasat*に革命的变化を起こした。それまで文字だけだった紙面に写真を効果的に掲載することで、読者層を拡大した。また、禁止されていた広告掲載を許可することで広告収入を可能にし、それをコストのかかる写真の掲載料や、執筆者に対する原稿料にあてた。このような出版物にかける情熱は、一九八〇年代に徐々に高まりをみせた。それは、この時代に政治的安定が保たれたことによるものだろう。

研究機関が刊行する雑誌としては、*Journal of the Siam Society*の歴史が最も古い。一九〇四年に設立された研究機関*Siam Society*は、設立年よりタイの歴史、芸術、

文化、言語などを取り上げた英語論文を掲載する本誌を刊行している。初期には、仕事などによるタイ滞在者、タイ国外のタイ研究者などといったタイ社会に精通する外国人がクラブを結成して執筆活動を行った。このクラブには王室関係者も加わっており、エリート集団の様相を呈していた。本誌が最も影響力を持ったのは一九六〇年代である。本誌には保守派エリートが保守的歴史観を書き示した論者が掲載されている。

●タイの一般雑誌

タイでは民間の出版社が刊行する雑誌が多く、学術情報交流の活性化にも大いに貢献している。

新聞社系の出版社が刊行する週刊誌には、出版部数が多い順に*Matchon*、*Nation*、*Siam Rath*がある。これらは一次情報を得る手段として学術論文においても重要視されている。また、*Matchon*の連載を執筆することが学者や知識人のステータスになると同時に、著名人をコラムニストに迎えることにより*Matchon*にも箔がつく。本誌に掲載されたコラムは、即座に大学の学生の間で話題となつてその執筆者に評判が生ま

れ、学生自身の判断基準を形成していく。発行部数が少なく、読者層が限られている大学紀要に比べて、こうした週刊誌は圧倒的な数の読者を抱えているため、学者や知識人が自身の主張を広めるための媒体としては最も有力であるといつてよい。比較的高い原稿料を得られることも、週刊誌への寄稿が好まれる背景にあるようだ。

三〇年以上の歴史を有す *Sinlapa Wattananatham* (芸術・文化) は、タイ国内外の考古学や歴史学などの論文が掲載される学術雑誌であり、とりわけ一九九〇年代に強い影響力を持った。学術的な内容であるが、図像資料を多用しているために大学紀要よりも一般読者が手に取りやすい。現在、大学関係者や博物館職員等が執筆者に名を連ねている。本誌の出版社は、*Matichon* と同じくマティチョン出版社であるが、もともとは芸術大学を卒業したスチット・ウオンテートが中心になって別個に編集・出版していた。経営困難になった際、学生時代からの友人であるマティチョン出版社のオーナー、カンチャイ・ブーンパンが株を買ってマティチョン出版社の傘下に加えたという経緯がある。

ところで、カンチャイとスチットは、自ら雑誌を出版する以前に先述の *Siam Rath* で校正や執筆の技術を磨いた。三つの週刊誌の中で最も出版部数は少ないが、最も歴史のある本誌は、小説家であり、タイの首相をも経験したククリット・プラモートによって創始された。文化人として著名なククリットの下で執筆を学んだ二人が、その後、タイの「コア・ジャーナル」を生み出したというわけである。

いわばタイの *National Geographic* である *Sarakhadi* (ルポルタージュ) は、写真を多用してタイの自然・文化を紹介する雑誌である。人物へのインタビュー記事や一般に知られていないタイの文化の紹介などが充実しており、着眼点に優れた雑誌である。

他方で、タイでは政治・社会状況が変動する重要な時点において、雑誌が世論を牽引してきた。例えば、学生運動、民主化運動が盛り上がりを見せた一九七〇年代にひとつのオピニオンリーダーとなったのは、*Sangkomsat Parithat* (社会科学評論) である。ここには著名な学者や知識人らの論文が多く掲載されたが、これらは政治的な意味合いをもつ場合が多

く、世論の形成に強い影響力を持った。写真は右から本誌一九七二年五号、一九七四年八号の表紙であるが、この号は当時の日本商品不買運動に関する特集である。表紙のイラストからも、雑誌の強いメッセージが読み取れるであろう。

Sangkomsat Parithat が、その強い政治的主張ゆえに、発刊を制限されると、一九八〇年代から影響力をもったのが、チュラロンコーン大学の経済学者グループが中心となって刊行した *Warasan Setthasat Kan Muang* (政治経済学雑誌) であった。本誌には、タイの資本主義経済システムや政治を批判的に分析する論文が多く掲載された。また、キリスト教系の NGO によって出版された *Sangkhon Phathana* (社会開発) は、NGO 活動家や研究者の論文を掲載して NGO などの社会活動家たちの思想を形成する場となった。

最近では、*Fa Dieo Kan* (同じ空 II 平等) という雑誌が、知識人や活動家に社会体制批判とタイ社会の方向性を議論する場を提供し、大きな影響力を持つ。

このように、タイの雑誌は、学者や知識人らが自分の理想とする

社会を描き、また、理想を実現するための方策を訴えるメディアとしてあるという点で極めて特徴的である。換言すれば、タイのアカデミズムと社会とは、雑誌を媒介に緊密な関係性を保っているのである。外国の読者にとつても、こうした雑誌がタイ社会の動態を知るうえで有用な情報源になることは間違いない。

謝辞・本稿の執筆にあたり、神田外語大学の重富スポン教授、アジア経済研究所の重富真一研究員、船津鶴代研究員、今泉慎也研究員から聞き取りをさせていただいた。記して謝意を表したい。なお全ての文責は筆者にある。(こばやし まりえ/アジア経済研究所 図書館資料企画課)



Sangkomsat Parithat
左：1974年8号／右：1972年5号